

〈特集〉

著名な卒業生③

中学第21～30回卒業生

まえがき

高校関係者ならずとも多くの国民にとっても関心事、日本の夏を彩る一大イベント、太高的創立・創部百年にして初出場が切望されている……といえは高校野球の「甲子園大会」。その前身、全国中等学校野球大会そのものは、大正4年大阪・豊中球場で始まり、舞台を甲子園に移したのは大正13年の第10回から。その三年後には早くもラジオの実況放送が始まった。今回とりあげる第21回生の入学は大正6年（一九一七）四月、第30回生の卒業は昭和6年（一九三

に発した世界恐慌にともなう昭和恐慌……と、いくどとなく経済の荒波が打ち寄せた。それはまた企業等の淘汰を進め、生き残った企業産業は大きく発展もした。そして昭和6年に勃発した満洲事変前後から「激動の昭和」の時代となったのである。

（いままで同様、筆者の管見・独断による筆の走りをご寛恕願いたいが、「著名」ということにこだわらず、ユニークな生き方、業績を持つ方もできるだけ紹介した。毎度気がひけるが敬語表現を省いた点もお許しを乞いたい。）

産業経済界

前述した時代的背景もあって、この時期の卒業生はその後、中央・地方の産業経済界において活躍した人多く、そのさまはまさに綺羅星のごとくである。当初から実業界に身を投じた人も官界等から転進した人もおられる。

この時期の卒業生はその後、中央・地方の産業経済界において活躍した人多く、そのさまはまさに綺羅星のごとくである。当初から実業界に身を投じた人も官界等から転進した人もおられる。

秋草勲氏（22回）は東京帝大工学部造兵科、土木科を卒業、内務省の建設省に入り、最後は土木研究所長を務め、工学博士号を持つが、昭和34年藤田工業（株）に迎えられる、（株）フジタ工業専務に就任した。また糸井一氏（22回）は九州帝大法文学部を卒業、北上産業（株）の社長・会長を歴任した。氏は昭和24年より50年にかけての長きにわたり、同窓会東京支部の事務局長の任にあった。

次の回の大竹伊八氏（23回）は東京帝大工学部出身のエンジニアで、東邦レーヨン（株）に入り、各地の工場の建設・運転に尽力し、戦後本社に戻って常務を務めた。栃木県旧山辺村朝倉（現足利市）の早川和俊氏（23回）は東京農大を出て農業の経営とその指導に当たっていたが、渡良瀬川南の広大な土地を（有）早川農園として整備し、四季を通じて草木・花・庭園等を楽しむ場を造成し、一般市民の遊覧に供した。長らく同窓会足利支部長を務め、両毛の交流に尽力した。

大正15年卒業の組には多彩にして著名な人が多いが、その筆頭は

小山五郎氏（25回）であろう。氏は旧鳥之郷村大島の素封家大島家に生まれ、在学中に長野県の貴族院議員小山完吾氏の養子となり、東京帝大経済学部卒業後三井銀行に入り、戦後その社長・会長を務めた。また三井グループのリーダー、財界のパイロットとしての功績も大きい。銀行はその後、太陽神戸三井—さくら—三井住友銀行と名を変え、引き続き相談役・顧問等としてその指南役である。こうした例も稀有のことである。

足利市の殿岡利男氏（25回）は東京高等工業（現東京工大）を出て、地場産業の織物関係の家業を継ぐ立場にあったが、戦中の転換策でゴム工業の傘下に入り、戦後独立のゴム会社、興国化学（株）とした。この時相談に乗ったのが同級の小林勇氏（25回）で、氏は東京帝大法文学部卒業後帝国生命（のちの朝日生命）にいたが、殿岡氏の興国化学の創設に参加した。二人のコンビにより、天然ゴム、人造ゴム、広く合成樹脂等の素材を活用し、靴、マットレス、ボート等時代にマッチした商品の生産販売

を展開した（現社名はアキレス（株）。二人は相次いで同社の社長・会長を務めた。

地元太田では「風雲児」「快男児」の異名をとる黒川末男氏（25回）がいた。氏は旧制水戸高から早大法学部転学、卒業後は設立まもない中島飛行機製作所に入社。最後は中島の小泉製作所勤務課長であった。戦後はモーターボート製造の黒川技研工業等を設立、太田商工会議所の活動に熱心に取り組み、昭和32年から二期五年にわたり、その第三代会頭であった。旧中島施設の再利用、企業誘致、金山の観光開発等にも熱心だった。

次の回、昭和期最初の卒業生の代表格は秋草篤二氏（26回）。氏は山田郡旧矢場川村荒金（現足利市）の出身。東京商科大（現一橋大）を卒業して日本無線電信（株）に入社したが、まもなく通信省（のち電気通信省）に入った。戦後独立した日本電信電話公社（のちのNTT



小山五郎氏



秋草篤二氏

（株）に移り、経理関係の部課から副総裁、そして昭和52年には第四代総裁に就任した。また伊勢崎市茂呂出身の品川要治氏（26回）は東京商大専門部を出て総合商社丸紅に入り国内外で勤務したが、戦後「脱サラ」して京都慈照寺（銀閣）の入口に上州流うどんの店の「おめん」を開き、京都市内やニューヨークに支店を持つ。京都出身の夫人が戦時中、氏の実家に疎開した際、うどん打ちを修練し、これを商売に活用したという。

京浜地区では大手拓次氏（27回）が太中卒業後神田電機専門学校で電機技術を修め、ナショナル通信工事（株）、美松電気（株）の社長を務めた。また野島富雄氏（28回）は東京帝大経済学部卒、東京火災（株）を経て（株）新潟鉄工所に入り、社長・会長を歴任した。橋本弥平氏（29回）は東京商大を出て兼松江商（株）に入社、その副社長に就任した。長島武夫氏（30回）は横浜市立商

専を卒業、日本興業銀行に勤め、のち日東紡績（株）の常務・専務・社長・会長を歴任した。

なお、金山京浜同窓会は昭和51年5月に独立・発会したが、小山五郎会長をはじめ、今回紹介した20回代の京浜地区産業経済人が主力となって運営されたこと、本誌上に川上民之助氏が幾度か載せたとおりである。

さて、この時期の人たちが社会に出たのは、地元太田地方における中島飛行機の成長発展期に当たっていた。昭和期に入ると太中卒業生で中島飛行機に就職した人はうなぎ昇りに増える。その一人、青木逸平氏（27回）は中島知久平氏と同郷の尾島町出身、東京商大専門部を卒業すると中島飛行機に入り経理部門を担当した。戦後も富士重工関連の富士ゴム（株）を興し、その社長・会長となった。また中島・富士に勤め、関連会社を設立した人も少なくない。正田滋男氏（28回）もやはり中島氏と同郷、太中から中島に入り、技術畑を一貫して歩き、退職してしげる工業（株）を創め、スバルの内装部品関係の代表的メーカーとなった。

地方自治界等

この時期の卒業生は、産業経済界に比べ、また前の時期に比べ、中央政界での著名人は少ないが、この地方の県・市町村の自治、農工商業の指導的存在として実績を有する人は数多い。

武川英男氏（22回）は東京歯科医専を卒業し、太田で歯科医を開業、太高的学校歯科医を昭和23年から23年間、また歯科医師会新田太田支部長等も務めた。太田町議・市議もやり、第五代市議会議長に就任し、さらに昭和32～34年には第五代太田市長となった。のち昭和42年から46年の逝去まで二期、県議会議員を務めた。

相崎徳蔵氏（25回）は太田の酒造家の産、大阪高等工業を卒業、家業を継いだ。戦中は群馬県商工技手、太田地区食糧小売統制組合理事長等に任ぜられた。戦後、町の守旧的グループに対し進取的グループを組織し、太田振興倶楽部を結成、その会長となった。太田商工会議所の設立準備に加わり、三期六年間副会頭を務め、太田市議も三期在任、その間第十七



戸塚忠雄氏

代議長に就任した。

吉田清之助氏（23回）は山田郡川内村（現桐生市）の農林業兼職物業の家に生まれ、太中卒業後は父祖の業を継いだ。昭和24年に吉田織物（株）社長となった。かたわら原木市場、倉庫業等を兼ね、織物組合、森林組合等の役員を務めた。昭和30年には県議会議員となり、二期八年在任した。その間、社会党県議団長として活躍した。

戸塚忠雄氏（25回）はご案内のとおり本同窓会の第三代会長で、昭和44年より十六年余の長きにわたりその任にあった。氏は盛岡高等農林（現岩手大農学部）卒業後、農林省園芸試験場勤務等を経て、東長岡の大農家に帰り、農業経営・農政における指導的地位にあることが久しく、県農業会議会長など数多くの役職とその実績を持った。市議会に出たのは一期だけであったが、市政等でのご意見番的役割を果たした。人権擁護委

員等も長く務めた。同窓会では二代天笠会長のもとで副会長でもあったので、母校の六十周年、七十周年、八十周年の記念事業の推進、九十周年のその準備等、その功績は比類のないものがあつた。

ほかに少壮のうちから農村・農協指導者として活躍した人物が多いが、旧宝泉村別所の渡辺寿雄氏（29回）は東京農大専門部の出身。昭和23年の宝泉村農協の設立時には三十歳代半ばで理事、32年には早くも組合長、さらに宝泉・強戸・毛里田の三農協が合併した太田市中央農協の組合長にもなり、県農協中央会副会長等各種団体役員を歴任した。かたわら昭和26年から県議会議員一期を務めた。

刀圭界

医師・歯科医師・医学者として各地で活躍した人もかなり多い。たとえば21回卒業生八十四名中、医師は七人、歯科医師は二人である。その一人岸吉衛氏（21回）は尾島町の医家に生まれ、東京帝大医学部を卒え、産婦人科学を専門とし、各地の病院の医師・管理職

を歴任した。昭和18年開校した前橋医専（群馬大医学部の前身）の教授に迎えられる話もあったが、郷里で家業を継いだ。教育論、教育政策についての見識も高く、町の教育委員に選ばれ（当時は公選制）、教育委員長になり、昭和34年から二期八年県教育委員を務め、ここでも委員長の大任を負った。

斎藤静三氏（24回）は邑楽郡長柄村（現邑楽町）の農家の産、東京歯科医専を出て小泉町（現大泉町）の開業歯科医第一号となり、現大泉高校はじめ学校歯科医を数多く担当した。戦後、町の文化協会、体育協会の創始等、広範な業績もあり、町制三十周年の際、名誉町民に推戴された。

医学者としては旧宝泉村下田島出身の藤生太郎氏（25回）がいる。京都帝大医学部を卒業、産婦人科学を専門とし、国立下関病院長などを経て山口県立医大（のち山口大学医学部）教授に就任した。退官後は北九州市で産婦人科クリニックの院長を務めた。

関根友次氏（27回）は東京歯科医専を出て、現太田市東本町に開業した。戦後まもなくは太田振興

倶楽部（相崎氏の項参照）の中心的メンバーだったこともある。歯科医師会等各種名譽職に就いたが、温厚公正さと見識の豊かさを囑目され、昭和43年より九年間太田市教育委員、うち六年間は委員長であった。同窓会副会長が長く、戸塚会長の良き補佐役を務めた。

伊勢崎市の美原博氏（29回）も著名な医師である。慶応大医学部を卒業、内科学を専門とし、病院勤務、軍医を経て戦後、現大手町の医院を継いだ。当時脳卒中が日本での死因の首位にあつたので、その研究・治療を重視し、昭和38年脳血管研究所、翌年同所付属美原記念病院を市内太田町に設立した。この方面のバイオニア的業績により、医学界で権威あるエルウィン・フォン・ベルツ賞を昭和51年に受賞した。

境町の正田豊作氏（30回）は若くして医師と俳人となる。旧制松本高校に進んだが、新潟医大（現新潟大医学部）に法医学の教授で俳人としても名をなした高野素十氏がいることを知って同学に進学し、素十氏に師事した。郷里境町に開業（夫人と共に内科・小

児科）したが、俳人として著名で県下俳壇の第一人者であること、本誌に毎号寄稿される欄の紹介に記載のとおりである。

教育・文化界

大学教授になった人も少なくない。さきの藤生氏もそうであるが、川端清策氏（23回）は北海道帝大理学部で生物学を専攻し、各大学等を経て高崎経済大に迎えられ、昭和49年から二年間、同学学長に就任した。その後札幌にある道都大学の教授、学務理事を務めた。

小沢文四郎氏（27回）は東京文理科大学で漢文学を専攻、卒業後外務省留学生に選ばれ、しばらく中国で研究に従事した。帰国後長く東洋大学の教授を務めた。その間、漢代易学をテーマとした論文により博士号を得た。同窓では最初の文学博士として知られる。

栗原藤三郎氏（28回）は京都帝大医学部薬学科（現京大薬学部）



笠原治久氏

を卒業し、岐阜薬科専門学校、岐阜薬科大の教授を長く務め、東北薬科大に招かれ同学教授・学長に就任した。同学名誉教授である。遠山哲夫氏（29回）は東北帝大理学部で数学を専攻し、長らく桐生工専・群馬大学工学部教授を務めた。その間、母校太中で昭和18年から23年にかけて非常勤講師でもあつたが、数学の指導ぶりや生徒と一緒に走ったマラソン大会、また受験指導ぶりにおいても、非常な熱血漢ぶりを示したことでも知られる。

母校の教壇に立った人も多い。

笠原治久氏（25回）は東京帝大文学部倫理学科を卒え、各地の学校、民間会社、県教委事務局を経て、昭和37年に館林高校長から母校第十二代校長になり、三年間在任した。同窓校長としては五代湯沢校長、十代飯田校長に次ぎ三人目である。含蓄のある訓話を生徒に与えた校長であつた。このほか戦後の教師陣の中から特徴ある人を挙げれば、福田俊郎氏（21回）は東北大法文学部英法科卒、初代定時制主事。山越忍齋氏（21回）は東京帝大文学部哲学科卒、足利市の

鑑阿寺住職でもあつた。共に初期の定時制教育を支えた。定方雄吉氏（22回）は独学で作曲家となり童謡や多くの小中学校校歌の作曲で知られる。服部保祐氏（22回）は東京美術学校（現芸大）西洋画科卒、共に戦後まもなくから退職まで母校の芸術教育を担い、ユニークな人柄で知られた。熊木善七氏（24回）は群馬師範、文部省検定を経て内地、朝鮮で中等学校教員となり、昭和24年より母校生物教師、昭和40年より教頭を務め、温厚篤実な人柄で知られた。

私立学校教育で業績を残した人も幾人かいる。さきの山越氏も足利でその実績を持つが、森下富士氏（29回）は国学院大学高等師範部を出て教師となり、父君定八氏の創立した旧鳥之郷村鳥山の金山女学校・金山高校の校長、金山幼稚園園長を長く務め、多くの子女の教育に当たった。

最後になったが、ここで二人の画家を紹介したい。正田二郎氏（24回）は旧綿打村花香塚の生まれ。画作の念強く、綿打村長であつた父盛作氏の反対を押して上京し川端絵画研究所に学び、作品が帝展

に入選した。帝展審査員能岡美彦氏に師事して同氏主宰の東光会友となり、独特な風景画で新境地を開拓した。脊椎カリエスに侵され、惜しくも四十二歳で病没した。兄の太郎氏（16回）も絵心ある人、太郎氏の子である壤氏（44回）は現在県下美術界の第一人者。正田家には画家としての血が流れているといえよう。もう一人は旧高島村秋妻（現邑楽町）の築比地正司氏（27回）。東京美術学校を出て画家となった。郷里において教材商も営みながら画業を続け、近年は戦前からの農村・農民の生活に題材を求めた絵を数多く描き、「群馬のミレー」として知られる。絵画としての価値、独特な味わいもあることながら、農村史の資料的価値も高いとされる。（高7回正田安司）

あとがき

錚々たる先輩数多くおいでの中を勝手に選び出し、その人物について的確に表現するのは、筆者にとり極めて難事である。今回は校歌百年にちなむ記事にするため、本欄は休載するが、次々回以降に向け、同窓諸氏からのご意見、ご助言を心待ちにしております。